

キリスト新聞への提言(上)

— さらに信頼される新聞を目指して —

キリスト新聞社は本年、会社創立60年を迎えます。編集局では、この機会を一つの節目としてとらえ、皆さまのご意見を参考に新聞の担うべき役割を再考し、より充実した紙面作りの方向性を模索していきたいと考えております。そこで、今号と次号では、キリスト教界でご活躍中の方からいただきました弊紙に対する提言を紹介いたします。
(編集局)

小原 克博

同志社大学神学部教授



(こはら・かつひろ)1965年生まれ。同志社大学大学院神学研究科博士課程修了。現在、同志社大学神学部教授。専門は、キリスト教思想、比較宗教倫理学。著書：『キリスト教と現代—終末思想の歴史的展開』(共著)他。

「キリスト新聞への期待」

キリスト教系メディアが果たすべき役割は大きくは二つある。一つはキリスト教に関する情報を社会に伝達すること。もう一つは、社会がもつ情報に対し、キリスト教の視点から批判的洞察を加えることである。

第一の役割において、情報伝達の第一の対象とされるのはキリスト教関係者であり、その点で、キリスト新聞は必要な役割を果たしてきたと言える。

しかし、クリスチャンが圧倒的少数者である日本社会において、そこにとどまっていたのでは、いつまでも「内輪向けの業界紙」以上の役割を果たすことはできないだろう。

欲を言えば、クリスチャン以外の日本人や、一般の日本のメディアが注目するような記事を時々は発信すべきである。さらに言えば、孤立しがちな日本の状況を少しでも改善するためには、世界

に対し、日本のキリスト教界の状況を大雑把でもよいから伝えるような媒体であってほしい。

今日、宗教に関連するニュースは一般紙においても頻繁に扱われており、とりわけ日本の最大のパートナーであるアメリカの動向の一端を紹介

している。このことは、先に挙げた二番目の役割、すなわち、社会に対する批判的機能がとも関連している。さらに別の角度から、キリスト新聞社への注文を述べよう。現在はその切り取るようなワンショットがほしい。記事の内容に関しても、同じことが言える。

「内輪向け」以上の役割に期待 さらに社会批判機能としての自覚を

いることが多いのだ。たとえ少数であっても、日本本のクリスチャンは知的レベルが高い、などおだてられていた時代が終わりつつあることを感じることがある。キリスト新聞社も、その責任の一端を担っている。

このことは、先に挙げた二番目の役割、すなわち、社会に対する批判的機能がとも関連している。さらに別の角度から、キリスト新聞社への注文を述べよう。現在はその切り取るようなワンショットがほしい。記事の内容に関しても、同じことが言える。

また写真の重要性を見直してほしい。毎号、集会等の講師・会場の写真が多く、紋切り型である。キリスト教は講壇宗教と言わなければならない。もっとと社会の実相を生々しく切り取るようなワンショットがほしい。記事の内容に関しても、同じことが言える。

か。「預言者の働きなど」と大きなことを言うつもりはない。少なくとも、一般社会は積極的に押し出す形でメリハリを付けている。

この点、キリスト新聞社のインターネット戦略は、あまりに奥ゆかし過ぎる(出すべき内容がないとなれば、なお問題である)。

また写真の重要性を見直してほしい。毎号、集会等の講師・会場の写真が多く、紋切り型である。キリスト教は講壇宗教と言わなければならない。もっとと社会の実相を生々しく切り取るようなワンショットがほしい。記事の内容に関しても、同じことが言える。